

2022年10月30日主日礼拝

説教題「賛美は、すべての人に」ヨハネによる福音書9章1〜7節

主任牧師 加藤 誠

「イエスはお答えになった。『本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである』(ヨハネによる福音書9章3節)。

レニー先生がアメリカの南部バプテスト連盟の宣教師として、日本に派遣されたのは戦争から16年経った1961年3月のことでした。当時のことをわたしは知りませんが、その頃のアメリカ人と日本人との関係は、非常に複雑なものがあったのではないかと想像します。そこには両国の間で戦われた三年半の戦争が暗い影を落としていました。日本は軍国主義に染まりアジア太平洋諸国に多大な悲しみと犠牲を生み出した加害国であり、敗戦国でした。当時、アメリカ人の相当数の人々が日本に対して悪感情を抱いていたであろうと想像します。両国の間で戦争が始まった時に、最後の捕虜交換船で日本からアメリカに帰国したギャロット宣教師は、宣教師の報告集会で、アジア各国に派遣されていた宣教師たちが現地での日本軍による残虐行為を次々に報告する中で、報告会の会場に日本に対する怒りと憎しみが満ちていることを体中で感じられ、壇上に上がった時、一言も発することができずに立ち尽くし、「それでも、神さまは日本を愛しておられます」という言葉を発して壇を降りたといいます。教会の集まりでも人々の間に日本に対するそれだけの悪感情があふれていたのですから、一般の人々の間ではもっと厳しい視線が日本に対して注がれていたのではないかと想像するのです。これは大谷恵護先生から伺った話で、かなりショックだったので心に刻まれているのですが、戦争から20数年たって、レニー先生と恵護先生が結婚することになった時、レニー先生が育った町の人たちは、「レニーがダーティ・イエロー・ジャップと結婚した」と語り合ったそうです。「汚い黄色の日本人野郎」。戦争から20年経っても、アメリカの人びとの中には日本人に対するそのような感情があったのです。

そういう日本とアメリカとの関係の中で、日本に遣わされてきたレニー・V・サンダーソン宣教師という方は、わたしが知る限り、広い視野を持ち、国籍や肌の色で人を偏り見ることの無い、フェアな方でした。どの人に対しても、上下関係でみるのではなく、神さまにつくられた一人の尊厳をもった存在として平等に、自分を愛するように、一人ひとりを愛して向かい合ってくださった、フェアな方でした。レニー先生のそのフェアな感性はどこから来ていたのだろうか。一番大きな影響は聖書からであり、ご両親からであったのだろうと思います。先ほどの恵護先生との結婚の時、町の人々がどう言おうと、ご両親は「自分たちの子どもの中から牧師が出ることをずっと祈ってきた。その願いを神さまが聴いてくださってうれしい」と言って祝福してくださったそうです。ご両親は、人の言葉ではなく、聖書のイエス・

キリストに言葉に深く固く立ち、そのご両親の祈りの下でレニー先生は信仰を育まれたのでした。

またレニーノートによると、レニー先生の幼い頃、南部の農場でアフリカ系の農夫たちが歌を歌いながら綿を摘むのをそばで聞きながら、ご自分も綿を摘んでいたエピソードが記されています。レニー先生にとって、アフリカ系の農夫たちは、自分に音楽を教えてくれて一緒に働く仲間という感覚だったのでしょう。

今朝の巻頭言にはレニー先生が神学校時代に視覚障害の方たちと出会われた時のエピソードを紹介させていただきましたが、その大切な出会いを通して先生は「肉眼が見えないことは決定的なことではないこと」を学ばれました。誕生時に薬害のために視力を失ったルーシーからもレニー先生は大切なことを学ばれました。…神はすべての人に「見る」方法を与え、私が見ることのできない多くのものをルーシーは「見る」ことができました。彼女は色を見分ける自分の方法を知っていて、彼女の世界は私には見えない様々な色で一杯でした。…そのようにして、一人ひとりに「見る」方法を与えておられる神さまの不思議な恵みを賛美し、一人ひとりに与えられている尊厳を大切にしながら一緒に歩いていく感性を、レニー先生は聖書から豊かに育んでいかれたのです。

今朝、ヨハネ福音書 9 章を開きましたけれども、この生まれつき目の見えない人について主イエスが語られていることは、まさにレニー先生が神学校で友だちのルーシーから学んだことです。周囲の人々は生まれつき目の見えない人を「罪人」と決めつけていました。自分たちよりも「劣った、かわいそうな存在」として見、「自分たちが教えてあげることにはあっても、その人から自分たちが教えられることなどありえい」と考えていたのです。しかし、主イエスはそのように「自分たちは見える／あいつは見えない…と決めつけているところに、あなたがたの罪がある！」と厳しく指摘されたのです。そして、この人が目が見えないのは「本人が罪を犯したからでも、両親が罪を犯したからでもない。神の業がこの人に現れるためである」と語られました。ここで「神の業」とは「神の栄光」と理解できる言葉です。そして「神の栄光」とは「神に向かう賛美が私たちの間に起こされること」です。この人の上に賛美が起こされ、この人を通して私たちみんなの間に神に向かう賛美が起こされていくこと。そのこと神さまは祈り願っておられる。「なぜ、生まれつき見えないのか」。その答え、その理由を、私たちはすぐには知ることができません。それは大きな苦しみに伴うプロセスです。けれども神さまは必ず一人ひとりが神さまを賛美できるように導いてくださる。「なぜ」と後ろばかりを見つめ「犯人捜しをする」のではなく、「神さまが用意し与えてくださる未来の希望を見つめながら歩いていこうではないか」という主イエスの希望の呼びかけをこの聖書から聴きます。そしてレニー先生が友人のルーシーから学んでいかれたように、お互いに神さまから与えられた賜物を喜び賛美していく歩みをしていきたいのです。